

# Hisashi FUJITA

## Bergson. La philosophie intempestive (2022)



社会芸術学会&プロジェクト・マキコミヤ共催シンポジウム



### はじまりの 森崎和江

BEGINNING (:) KAZUE MORISAKI

2025.07.19 土  
14:30 - 17:00  
入場無料

川松あかり (九州産業大学)  
平芳幸浩 (京都工芸繊維大学)  
藤田尚志 (京都工芸繊維大学)  
大畑凛 (大阪大学)

自己と他者のなかにその先へ  
Beyond the Self and the Other

京都工芸繊維大学  
60周年記念館 1F 記念ホール  
地下鉄烏丸線 松ヶ崎駅下車、徒歩10分

ZOOM参加 (事前登録)

【お問い合わせ】京都工芸繊維大学 藤田研究室 kfuji@kit.ac.jp

2025年7月24日 (木)  
15:00 - 18:00  
京都工芸繊維大学 東4号館2階セミナー室

### エヴァ・イルーズ

## 「なぜ愛に 傷つくのか」をめぐって

哲学と社会学の対話  
婚活アプリ・コミット恐怖症・欲望の構造転換

講演：久保田裕之 (日本大学)

応答：酒巻鼓 / 高井優作  
(京都工芸繊維大学)

司会・応答：藤田尚志  
(京都工芸繊維大学)

問い合わせ：藤田研究室 (hfujita@kit.ac.jp)



ZOOMでの  
ご参加はこちら




## 結婚の 哲学史

連載企画  
藤田 尚志

*Déconstruction  
du mariage*

*Recherches  
sur Bergson*

no+e

慶應義塾大学出版  
会 Keio Universit...

## 『大学の余白』(現代書館、近刊)

### 第1章：“アカデミック・クォーター”、あるいは大学の時間

「大学の時間」、京都文教大学人間学研究所『人間学研究』第14号(2014)、70-77頁

### 第2章：「無用の用」の彼方に——効率性の脱構築

「役に立つ」とはどうか？——デリダ、プラグマティズムから考える哲学的大学教育論」、『2017年度 第21回□□フォーラム 報告集』(2016)、26-246頁

### 第3章：単位とは何か——大学改革を本気で考えるなら真っ先に考えるべきこと

「大学のために——ある読書会の記録」、『九産大国際文化学部紀要』第12号(2012)、12-12頁

### 第4章：「やる気を引き出す」とはどうか？——名ばかりFDを問う

「やる気を引き出す」とはどうか？FDを問う～批判と問題提起～」(2019年2月、福山市立大学FD講演会での講演)



## 『哲学的大学論の余白に』(刊行予定)

### 第1章:ソフィストのアレー(大学における哲学教育)

「ソフィストの力(アレー)——大学における哲学教育に関する若干の考察」、『哲学論文集』第五十輯(九州大学哲学会創立50周年記念)、2014年12月、75-102頁。

### 第2章:ニーチェ論(耳、聴く)

「耳の約束——ニーチェ『われわれの教養施設の将来について』における制度の問題」、西山雄二編『人文学と制度』、未来社、2013年3月、306-340頁。

### 第3章:ベンヤミン論(メディア、寄り道、パサーージュ)

《Université comme *média*, université comme “passage”. Théorie benjaminienne de l'université》(2011年の国際シンポでの発表原稿)

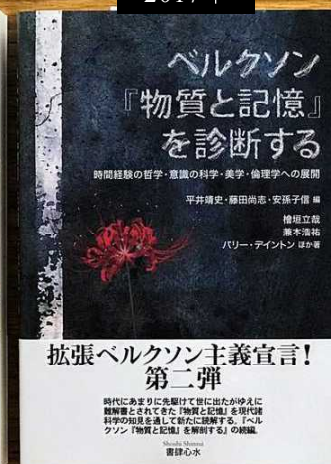
### 第4章:ベルクソン論 I (遅れ、ずれ)

《L'Université manque à sa place dans la philosophie française, ou *De la politesse* de Bergson》, in Camille Riquier (éd.), *Bergson*, Paris : Cerf, coll. “Les Cahiers d'Histoire de la Philosophie”, décembre 2012, pp. 223-238.

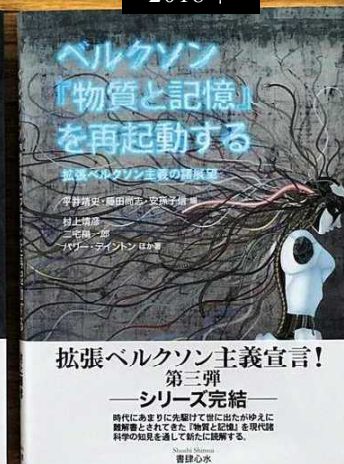
2016年



2017年



2018年



## PBJ: Project Bergson in Japan

1st period	2nd	3rd	4th	5th
2007-2009	2011-2013	2015-2017	2019-2022	2024-2026

EC

DS

MM

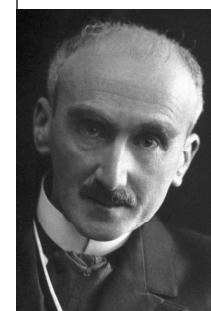
DI

Time

3-days international symposium each year and publication



## 'Expanded Bergsonism'



Analytic metaphysics  
- philosophy of Time  
- philosophy of Mind  
- philosophy of Perception

History of ideas  
Continental philosophy  
- phenomenology  
- poststructuralism

Science of consciousness  
- Cognitive psychology  
- Artificial Intelligence  
- Neuroscience  
- Psychiatry, Sociology, Aesthetics, etc

INTERNATIONAL WORKSHOP


# Time, Freedom, and Creativity: Bergsonian Perspectives

July 29 and 30, 2021  
 CET: 9:00-11:00, 13:00-15:00 / JST: 17:00-19:00, 21:00-23:00.  
 Online, Registration Required  
 Organizers: Project Bergson in Japan and Barry Dainton

Speakers:

- Barry Dainton (University of Liverpool)
- Hisashi Fujita (University of Kyushu Sangyo)
- Yasushi Hirai (University of Fukuoka)
- Kaoru Kamiyama (Miyagi Gakuin Women's University)
- Anne Sophia Mainicke (University of Vienna)
- Tatsuya Murayama (University of Tohoku)
- Mark Sinclair (University of Southampton)
- Yaron Wolf (Utrecht University)


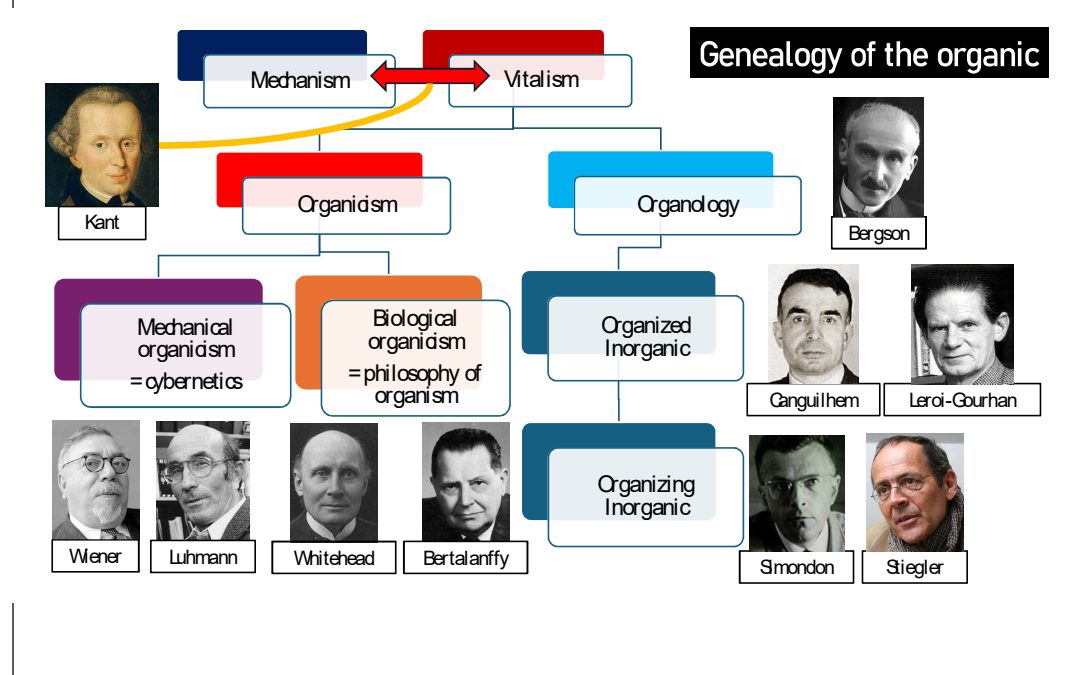
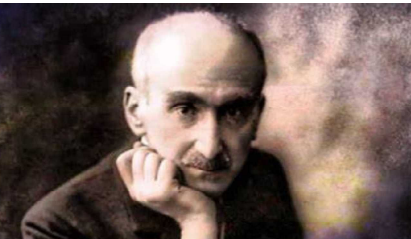
Register here: <https://forms.gle/WL551Ka37SAteG8>  
 Visit our official website at <http://imaterandmemory.jinro.com/>  
 Email: [hiraiya@fukuoka-u.ac.jp](mailto:hiraiya@fukuoka-u.ac.jp)



## 拡張ベルクソン主義的アプローチ ① 人格概念に関する 分析哲学とベルクソン哲学の接合

2021年7月30日(金) @ Virtual London-ZOOM

### On Personality. Analytic and Bergsonian Approaches

## BERGSON FACE À KANT

L'AQUILA  
29-31 MAI



info: [alessandra.campo@univaq.it](mailto:alessandra.campo@univaq.it)

## 拡張ベルクソン主義的アプローチ ② カント以来の技術哲学における ベルクソンの「器官学」の位置づけ

2024年5月30日(木) @ Università degli Studi dell'Aquila

Colloque international « Bergson face à Kant »  
29-31 mai 2024

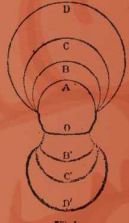
### La main de Bergson II organologie revisitée

Hisashi FUJITA  
Université Kyushu Sangyo (Fukuoka, Japon)



### Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives

4



Emiri Anano  
Tokai City University of Economics

Douglas Bonanza  
Grenoble Alpes University, Kato University

Hisashi Fujita  
Kyoto Institute of Technology

Kenshi Hirai  
Kansai University of Technology

Yasushi Hirai  
Kato University, Project Bergson in Japan

Christopher McCorrell  
National Yang Ming Chiao Tung University



Kouken Michaelson  
Grenoble Alpes University

Douglas Overton  
Grenoble Alpes University

Shin Sakaguchi  
Shibaura Institute of Technology

28TH & 29TH JUNE 2025  
KEIO UNIVERSITY  
MITA CAMPUS  
(TOKYO, MINATO-KU)

THE DETAILED PROGRAM WILL BE AVAILABLE ON THE PRJ/CPM WEBSITE  
(ACCESSIBLE VIA QR CODES).

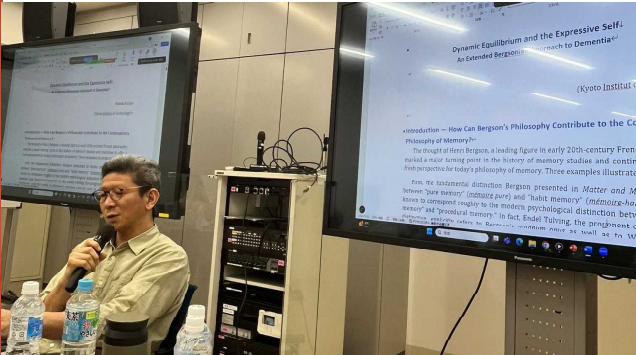
Organizers:

Douglas Bonanza (CPM, Grenoble Alpes University, Kato University)  
 Yasushi Hirai (Keio University, Project Bergson in Japan)  
 Kouken Michaelson (CPM, Grenoble Alpes University)

CPM: [www.cpm-project.org/](http://www.cpm-project.org/)  
 UGA: [www.univ-grenoble-alpes.fr/](http://www.univ-grenoble-alpes.fr/)  
 PROJECT BERGSON IN JAPAN  
 慶應義塾: Keio University  
 京都産業大学: Kyoto University

## 拡張ベルクソン主義的アプローチ ③ 認知症に対する ベルクソン哲学的理解の試み

2025年6月28日(土) @ 慶應義塾大学





## 第2章 動的平衡——回復としての病、局地的抗議としての苦痛

さて、「はじめに」で、ベルクソン哲学がどのように記憶の哲学に寄与しうるかを概観し、第一節で認知症の提起する問題がどのように記憶の哲学を進展させうるかを確認した。ここからいよいよベルクソン哲学の観点から認知症を見ていくことにしたい。すでに上述の記述から、おぼろげながら方向性は示されている。それは、記憶を静的なイメージ表象ではなく、動的な生成の過程として、過去と現在、知覚と想像、意識と身体との交差点で生じる「動き」のようなものとして捉えるという方向性である。そこでは当然、意識だけでなく、身体もきわめて重要な契機として記憶に関わっている。「記憶＝過去の痕跡」とする因果主義的理解と、「記憶＝現在の想像的再構成」とするシミュレーション主義的理解を統合しうる第三の地平、すなわち記憶の現実化と身体的記憶、これこそベルクソンの認知症理解が指し示す方向であるように思われるのである。

## 第1回研究集会 基調講演 納富信留教授(東京大学)



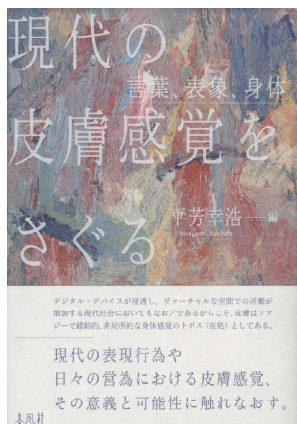
古代哲学・プラトン研究

## 第2回研究集会 テーマセッション 中橋侑里氏(人猫作家、デザイン研究者)



WIRED CREATIVE HACK AWARD ソニー賞 (2022)  
GOOD DESIGN NEW HOPE AWARD 優秀賞 (2023)

## (例1)かゆみ研究会 (2024-)



### 第1回 かゆみの哲学研究集会

2日目  
研究集会  
2025.2.7(金) 10:00-17:00

#### <講演者>

牛山 美穂 (大妻女子大学)  
加戸 友佳子 (摂南大学)  
宮原 克典 (北海道大学)  
飯山 陸 (早稲田大学)  
細馬 宏通 (早稲田大学)  
藤田 尚志 (九州産業大学)

### 心・意識



澤幸祐 (学習心理学)

兼本浩祐 (精神病理学)

### 生命・動物



西江仁徳 (霊長類社会学)

村上久 (動物行動学)

### 音楽・リズム



上羽由香 (音楽療法)



## ベルクソンと動物たち2

霊長類社会学  
×  
拡張ベルクソン主義

8月2日(土)14:00-17:00  
【ハイフレックス】

西江仁徳＋平井靖史＋藤田尚志  
＋村上久＋米田翼

2025年 8月2日(土)

14:00-17:00

京都工芸繊維大学 東4号館2階セミナー室

## ベルクソンと動物たち2



ZOOM参加も可！



問い合わせ先  
hfujita@kit.ac.jp

主催：PBJ

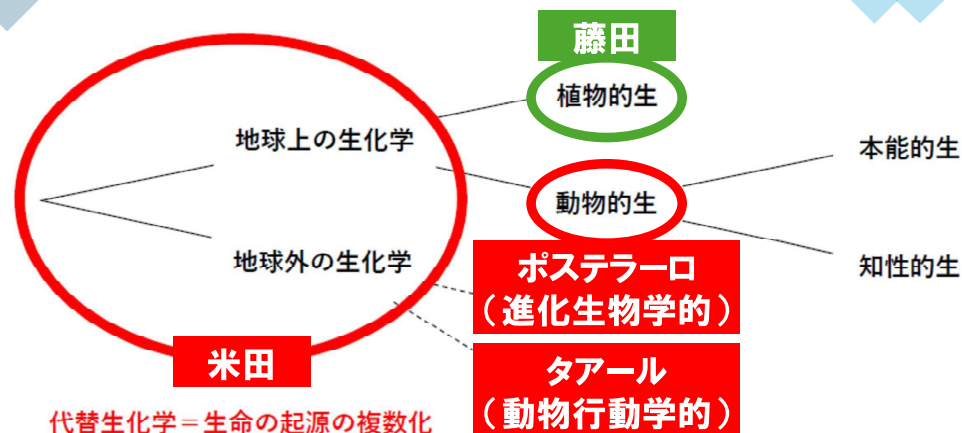
司会・提題者：藤田尚志（京都工芸繊維大学）

提題者：平井靖史（慶應義塾大学）

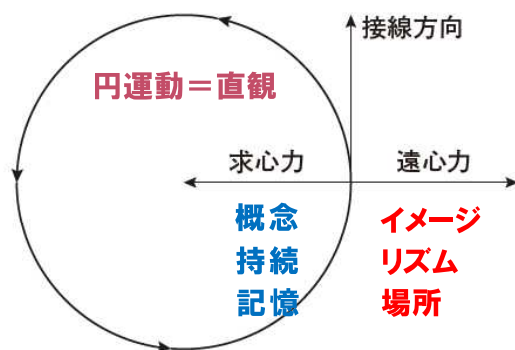
西江仁徳（京都工芸・京都大学）

応答者：村上久（京都工芸繊維大学）

米田翼（大阪大学）



## 概念とイメージの緊張関係



立ち止まっている人にだけ  
見える景色がある。

概念とイメージの緊張関係を精緻に読み解き、  
ベルクソンを反時代的哲学として読み返す。

leitao nhobo

## 米田の拡張ベルクソン主義

ベルクソン 有機体のエネルギー物質の指標元素が炭素と別の物であったら、造形物質の指標元素もたぶん窒素とは別になったであろう。すると生物体の化学は今とは根っから異なっていたことになる。その結果は私たちの現に知っている形態とは似もつかぬ生物の形態が生じたことであろう。それは解剖も別なら生理も別になるろう。ただ感覚・運動の機能ばかりは、それもその仕掛けは別として少なくともその効果の面に残ったであろう。してみると、生命は他の惑星上にも、それどころか他の太陽系内でも展開していそうに思われる。(邦訳302-303/EC 256)

米田 こうした視点から『創造的進化』を読み直すことで、ベルクソンが現代に生きていたら構想していたかもしれない、宇宙時代の自然哲学のプロトタイプを提案してみたい。(2024)



## 米田「生化学の偶然性」テーゼ: 生命の起源の複数化

地球とは異なる惑星では、生命にとっての課題は同じではない。  
恒星系に依存する生化学法則は、宇宙のどこでも適用可能ではない。  
ベルクソン哲学と代替的な生化学は、生命の起源を多元化する。

**別世界の生化学(exotic biochemistry):** 代替生化学的アプローチでも、  
生命を炭素の呪縛から解放しようとするラディカルな議論が近年増加。

Bains, J. [2004], “Man’s Chemicalities Could Be Used to Build Living Systems”, in *Astrobiology*, 4(2), 167

Petkovski, J., J. J. J. J., Bains, J., and Seager, Sara [2020] “On the Potential of Silicon as a Building Block for Life”, in *Life*, 10(6), 84.

## 運動性と自由

そうだとすると、植物は大地に固着し居ながらに養分が見つかるのに、  
いったい意識的な活動の方向に発展などしえたらうか。原形質を包むセル  
ローゼの膜はごく簡単な植物体までも動けなくし (immobilise)、同時  
にその大部分を外的刺激からかばう。同じ刺激が動物にはたらきかけた  
ら感受性のかきたて役になって動物を眠り込ませなくするであろう。  
(...) 意識は寄生物に退化して動かなくなった動物では眠り込んでいる  
とすれば、逆に運動の自由 (liberté de ses mouvements) を取り戻した植物  
にあっては、それは目覚めているに違いなく、その覚め方も植物の取り  
戻した自由さにきちんと比例している。(EC 112-113/岩波文庫142頁)

あたかも可動性が推奨すべき規範であるかのように。  
あたかも動物の可動性だけが唯一の尺度であるかのように。

La philosophie végétale de Bergson (Hisashi Fujita)

## 2-1-2. ベルクソンにおける植物の哲学



## ベルクソンによる植物界の植民地化？

しかし、とどのつまりは植物にゆきつく。植物だけが太陽エネルギーを  
真の意味で「生命エネルギーとして」受け止める。動物は太陽エネル  
ギーを植物から直にか、あるいはさらに動物同士のあいだでそれを渡し  
合うかして、借りるほかない。(EC 254/岩波文庫300頁)

動物に栄養を与えているのは植物。  
だがベルクソンにとって本質的なのは、動物の進化。

しかしそもそものはじまりから爆薬の製造は爆発が目的だったとしたら、  
つまりは動物の進化のほうが植物の進化よりもいっそう生命の根本的方  
向を顕示しているわけであろう。(EC 117)

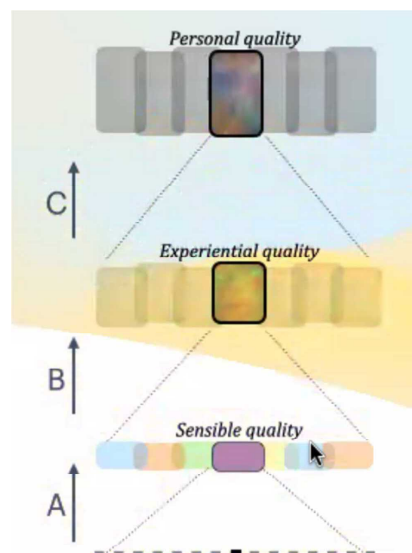
実のところ、ベルクソンは植物の自立性を認めていない。  
むしろ動物が植物の分を自分のものとするを正当化。

## 平井(2022)の マルチタイムスケール(MTS)理論

『創造的進化』の動物中心主義(animal-centrism)ないし動性中心主義(mobility-centrism)を打破し、動物と植物の関係を問い直すヒントは、拡張ベルクソン主義のなかに。

人間の生(感覚、経験、人格の保存)を「時間のスケール相対性」という観点から、階層的な時間構造で説明。

下位レベルの過去  
= 上位レベルにとって共-現在(co-présent)



## 植物的自由？植物的動性？

生命の根源にあるのは意識 (conscience) である。あるいは超意識 (supraconscience) と言ったほうがよいかもしれない。(...) しかし意識とはそこでは創造の要求なのであるから、創造が可能な場合でないと自身に対して意識としては現れない。生命が自動仕掛けに押し込められているあいだ、意識は眠っている。選択の可能性が蘇るやいなや、それは目覚める。神経系統を欠いた有機体の場合、意識がその有機体の自由にできる運動 (locomotion) ならびに変形 (déformation) の能力に応じて変わるのはそのためであった。(EC 261-262/岩波文庫309頁)

植物は、動物的でない仕方でも、創造的であり自由であると言えるだろうか？

意識は生物の自由にできる選択の能力にきちんと対応している。意識は現実の行動の周りに可能な行動が作る量 (かさ) と同じ広がりをもつ。意識と発明、意識と自由は同義語なのである。(EC 264/岩波文庫311頁)

## 意識は神経系を必要としない

植物と動物は、それぞれが自らの可能な作用を反映するイメージだけを、イメージの全体性から差し引くことによって、異なる「知覚的世界」を創出。

しかしながら、このような運動性や選択やひいてはまた意識はいずれも神経系の存在を必要条件とはしていない。(...) ある動物に脳がないという理由で意識もないとするのは、胃がないから養分を摂ることができないというのに劣らず愚かしい言い分であろう。(...) 神経系は機能を作り出しはしない。神経系は反射活動と有意活動のとの二重形式をその機能に与えて、機能の強度と精密度とをいっそう高めるにすぎない。(EC 111/岩波文庫140-141頁)

米田が指摘したように、もし珪素生物に「知覚」を認めることができるなら、植物に「意識」を認めることも可能であるように思われる。問題は、それが**いかなる種類の意識なのか**、という点である。

ギンズバーグとヤブロンカがベルクソンの「意識」概念に、動物の意識の特性=UAL (Unlimited Associative Learning)=**無制限連合学習**を見出さなかったのはある意味で当然。ベルクソンの「意識」あるいは「超意識」は、動物だけでなく、植物、さらにはETLまでカバーするものだから。

## 植物性の哲学の可能性

